

# 『「寅彦の見た風景」を探して—寅彦少年のコスモロジー—』 講演要旨

野村 学

## はじめに

寅彦先生の見た風景を改めて自分の目で確かめてみたいという思いから寅彦先生を巡る文学散歩を続けてきました。このような個人的な文学散歩の記録を会報『榭』に掲載いただいておりますことに感謝を申し上げます。今回過分にも機会をいただき、発表させていただきましたが、人前で話すことになれておらず、当日充分にお伝えすることの出来なかったことについての補足も含めての講演要旨とさせていただきます。

## 自己紹介

まず自己紹介をかねて、寅彦先生に関わりのある場所をいくつか紹介いたします。これらは私の昔過ごした場所でもあります。

一つは須崎市。須崎のまちは寅彦先生が大学生のとき、病氣療養のために過ごした町であります。このときの体験をもとに小説『嵐』が書かれたことはご承知の通りです。日記にも須崎での療養生活のことが記されており、また療養中に画かれた“台場”や“新莊川”のスケッチも残されています。私もこの須崎市で小学4年生から高校2年生までの7年の間、過ごしました。寅彦先生の見た砂浜（富士ヶ浜）やお台場で遊んだ経験もあります。寅彦先生がその風景をスケッチした新莊川河口ではよく父親とイタドリを採ったりもしたものです。

次に紹介するのは高知市孕西町。私が大学1年生から3年生までを過ごした場所です。「孕」といえば“孕のジャン”が思い起こされます。地質学生であった私も孕のジャンを読むために『寺田寅彦随筆集 二巻』（岩波文庫）を購入したことでした。孕のジャンの舞台、孕門は当時私の住んだ家のすぐ近くであり、寅彦先生の見た浦戸湾の風景を私もまた身近に見たことでした。南海トラフ地震との関連も指摘されるこの“孕のジャン”を、幸か不幸か、私はここで過ごした3年の間に聞くことはありませんでした。

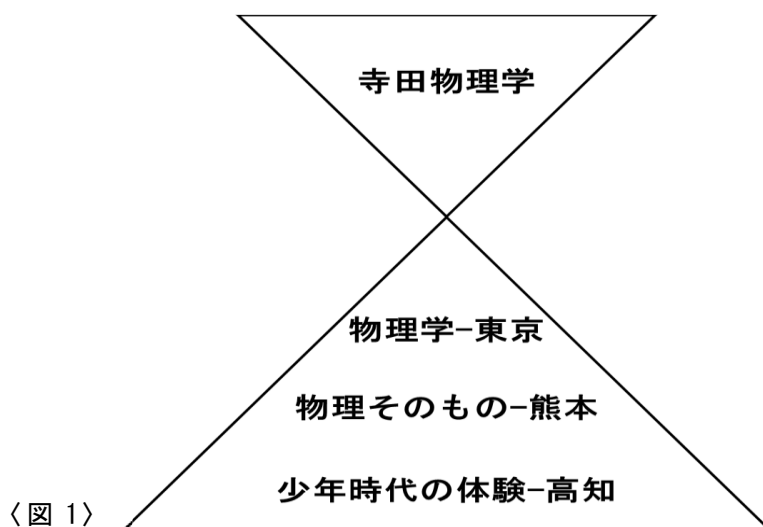
今ひとつは、高知市朝倉であります。朝倉と言えば小説『竜舌蘭』の舞台、伊野部のお姉さんの家のあった場所です。学生時代に私は伊野部家の近くに下宿しておりました。また『竜舌蘭』に登場する“柳の番所”跡も、よく自転車で通っていました。もっとも当時はそんなことはつゆも知りませんでした。

最後に紹介するのは高知市入明町です。入明町は寅彦先生の頃は旧江ノ口村に所属し、この記念館からもすぐのところ。この入明町にわたしは1年ほど住んでおりました。当時の自宅からJRの線路を挟んですぐ北にある寅彦先生とゆかりの深い小津神社を訪れ、また初めて寺田寅彦記念館を訪ねたのもこの入明のまちに住んでいるときでありました。たった一年でしたが、寅彦先生の古蹟の多く残される場所で過ごした経験が今の「寅彦の見た風景」に繋がっているように思います。

以上に紹介した場所や風景は、私が過去に住んだことがあり、実際に目にした風景であります。

### 「寅彦の見た風景」の位置づけ

ただ寅彦先生のゆかりの場所を自分の目で見てみたいという思いだけで始めた文学散歩でしたが、「寅彦の見た風景」を書き続ける中で、〈図1〉のような概念図が私の頭の中に浮かぶようになりました。つまり寅彦先生の人生をピラミッド型で表すと、まず土台に高知での少年時代の体験があり、そのうえに熊本時代、田丸卓郎先生に学んだ“物理そのもの”が重なる。そして、東京の最高学府で学んだ方法論としての物理学。この積み重ねのうえに、逆三角形のように寺田物理学が発展していったのではないだろうか、ということです。そう考えると、ピラミッドの一番下、その土台である高知での体験のなかに、寺田物理学の本質をみることができるのではないだろうか、「寅彦の見た風景」を書くことによって寅彦先生のものを見方をより深く理解できるようになるのではないだろうか、そんな思いを抱くようになりました。すなわち、【少年時代の体験＋西洋物理学＝寺田物理学】ではないだろうか。おおげさにいえば、「寅彦の見た風景」をみることによって寺田物理学を理解したい、ということでもあります。



### 「寅彦の見た風景」を探して

現在までに、10編の「寅彦の見た風景」を書いてきました。それをまとめたものが図2であります。日記の書かれた時代順に並び替えています。

日記の年代	風景	テーマ
●明治 25 年以前	丸山台 土佐郡第一高等小学校	コレラ禍の一断片 忘れられた学校
●明治 25 年	追手御門	ちょっと雨宿り
●明治 26 年	水上の道(大川筋～浦戸湾)	寺田物理学の原風景
●明治 29 年	本丁筋 水通町 今井写真店 延命軒	未来に開かれた扉 風景を共有する二人の科学者 郷土の新知識－今井風山軒 蓑田先生－その出会いの重要性
●明治 34～35 年	楠病院 車瀬 紺屋町 荒倉峠 天神橋・大楠	追憶の病院 古い思い出の地 表現のユーモア 『嵐』の世界の出入り口 変わらない風景

〈図 2〉

はじめのうちはただ場所の紹介をするだけのものでしたが、回を重ねるごとに次第に場所ごとのテーマを意識するようになりました。特に大きなテーマを持って取り組んだのは「水上の道」、「荒倉峠」、「水通町」などです。

「水上の道」では、“寅彦先生の原風景” をテーマとして取り組みました。自宅前の大川筋から浦戸湾を経由して種崎に到るルートを日記を紐解きながら辿ることで、楽しいことも悲しいことも含めた寅彦先生の人生を垣間見ることができたように思います。また浦戸湾の風景の中に寺田物理学の原風景のようなものを感じることが出来ました。私にとって思い入れの深い風景であります。

「荒倉峠」は「水上の道」に次ぐ、もはや散歩とは言えない長距離の文学散歩でありました。寅彦先生に倣って自転車で峠を越えることによって、より身近に寅彦青年を感じることでできた旅となりました。また峠に立ち、そこから見える風景を眺め、風の音を聴き

ながら当時の日記を読むと、『嵐』の舞台を行き来した寅彦先生の当時の気持ちが伝わってくるような気がしました。そしてその風景の中に夏子さんの姿を見ることが出来たように思います。

「水通町」を訪ねた際には思いがけず田中茂穂青年を発見し、寅彦青年の交遊の跡を見ることが出来ました。寅彦少年と茂穂少年の見た風景の中に科学者としての感性を育んだ何ものかが潜んでいたのでしょうか。また田中青年を調べる過程で田中博士の命名した魚・コンペイトウを知ることが出来たのは大きな喜びでした。

「今井写真店」を探す過程では、「新知識」今井風山軒を知ることとなりました。果たして寅彦先生が今井貞吉と話すことがあったのかどうか定かではありませんが、坂本龍馬と河田小龍のような関係が寺田寅彦と今井貞吉の間になかったかどうか、勝手な空想が膨らみます。

「本丁筋」では、新たな世界へ飛び出す前の寅彦青年の新しい知識への渴望を見る思いがしました。執筆の際に引用した植木枝盛の言葉「未来が其の胸中に在る者、之を青年と云ふ」は、まさにこの時期の寅彦先生にこそふさわしい言葉ではないかと思いました。今はない村岡書店や小川書店の幻影を求めてまちを徘徊した時間は私にとって貴重なものとなっております。

「延命軒」では寅彦青年に大きな影響を与えた存在としての蓑田先生を周辺の風景とともに描くことで、その存在の大きさを再認識しました。下宿跡を探し、その場所に佇むことによって、この魅力的な人物・蓑田先生をもっとよく知りたいと思うようになりました。

「土佐郡第一高等小学校」では取り上げられることの少ない高等小学校の跡地を確かめられたことが大きな収穫でした。寅彦先生の高知での学校教育を受けた場所がこれですべて揃いました。

「丸山台」は高知の歴史の中では板垣退助帰県の際に歓迎会の行われた場所として有名ですが、寅彦先生の日記を紐解くとコレラ禍の歴史が見えてきました。この丸山台は堀川と浦戸湾の接続する辺りにあり、ここを頻繁に行き来した寅彦先生にとっても見慣れた風景であったことでしょう。

「天神橋・大楠」では150年前と変わらない風景を見ることができました。社会は変わ

っても自然の風景は、寅彦先生の時のまま、これからも存在し続けるのでしょうか。

「追手御門」は私をはじめで寅彦先生を巡る文学散歩で訪れた場所です。追手門は今まで何度も通ったことのある場所ですが、寅彦少年が雨宿りをした場所と認識して訪れると感慨もまた一入といったところでは。どのあたりでおばさんに火を借りたのだろうか、と想像するのも楽しい時間でした。それにしても、このとき寅彦少年は13歳。すでに煙草を吸っていたことに驚きです。

「楠病院」は『追憶の医師達』に登場する楠正任医師の病院です。当時の写真を見ると大きな建物で敷地も広がったようですが、今は雑居ビルや駐車場となっていました。時代の流れを感じます。

「紺屋町」ではのちの寅彦先生につながる文章表現を知ることが出来ました。精確な文章表現のなかにそこはかとないユーモアが隠れており、「俳諧」の要素がそこに含まれているのでは、と思いました。この日記が書かれた明治35年当時は、すでに夏目先生と出会い、正岡子規を根岸庵に訪ねた後でした。そのような影響もあるのでしょうか。

「車瀬」はただの通り道ではなく、寅彦先生にとって懐かしい風景であったようです。宇田道隆博士の残した寅彦先生の言葉「今日北町君のうちの前を通った。車瀬も通りました。古い思い出の地は皆のぞいて来ました。」を噛み締めながら何度もこのあたりの風景を訪ねたことです。

### まとめ

以上まとめますと、寅彦先生が高知での見た風景は大きく3つに分けられると思います。つまり「自然」・「土俗的世界」・「未来」の3つです（図3）。

3つの世界	
●自然	海鳴り、海陸風、夕凧、北山の山火事、雷、嵐、虫取り、味覚など
●土俗的世界	重兵衛さん、春田居士、祖母、亀さん、妖怪、北山からくるものなど
●未来	簗田先生、楠さん、フランス語の青年、本・本屋など

〈図3〉

寺田物理学に代表される寅彦先生のもの見方は、この3つの世界と西洋科学の絶妙なバランスのうえに成り立っているのではないのでしょうか。そして、のちにこの体験から様々

な研究が生まれたことを考えると、寅彦少年のコスモロジー（世界観）を育んだこの土地は、大げさに言えば「寺田物理学の原風景」というのではないのでしょうか。

以上で発表は終わりですが、私の専門とする地質学の方面から少しだけ勝手な想像を膨らませてみたいと思います。寅彦先生が物理学者としての感性を育んだ場所・高知は、1970～1980年代、寅彦先生もその一端に触れていたプレートテクトニクス論研究のメッカでありました。ウェーゲナーの大陸移動説に刺激を受けた寅彦先生が日本海拡大説を唱え、また高知県の海岸地形を調査することで現代のプレートテクトニクス論に肉薄していたのではないかと、ということにつきましては鈴木堯士先生の『寺田寅彦の地球観』に詳しく書かれています。

ウェーゲナーの大陸移動説をいち早く日本で紹介した寅彦先生が亡くなられて、またヨーロッパでもウェーゲナーの大陸移動説に否定的な意見が多く、やがて大陸移動、大地が動くことについては、日本でも主張されることが少なくなりました。ところが、戦後、1960年代にアメリカ海軍の古地磁気を調べるという海底調査手法により海洋底が動いていることが確認されました。そして海洋底が動く結果として高知の、ひいては日本の地質帯が出来たのだと言うことを実証し、主張したのが鈴木先生をはじめとする高知大学地質学教室の先生方です。寅彦先生の主張から40～50年の時を経て、改めて寅彦先生の主張が、このゆかりの地である高知県で実証されたことは本当に素晴らしいことだと思います。

プレート運動によりできた高知の風景によりその感性を育まれた寅彦先生が、高知の風景を舞台にした一連の論文で、そのプレート論に肉薄していたということは非常に興味深いですし、そういう二重の意味で日本のプレート論、日本の大陸移動説の原点は寅彦先生のみた高知の風景にある、ともいえるのではないのでしょうか。また寅彦先生が、西洋科学の本場のヨーロッパでも認められなかった大陸移動説を抵抗なく受け入れて、更に日本列島に当てはめ独自の日本海拡大説を唱え得たのは、高知の海岸風景をはじめとする日本独自の地質がつくる風景を子どもの頃から見てきたからではないかとも思います。特に変動帯の日本とは正反対に安定大陸であるヨーロッパから帰ってきたばかりの寅彦先生は、改めて日本の風景を見て大地が激しく動くことを容易に想像できたのではないのでしょうか。以上は、わたしの勝手な想像であります。

#### おわりに

最後に中谷宇吉郎の言葉を引用して終わりにしたいと思います。



「私は一つの発見をした。それは寅彦の遺跡は、高知市及びその近郊の至るところにあるが、それは建物や銅像の形でなく、人々の心の中にある、ということである。」

(中谷宇吉郎「寅彦の遺跡」より)

中谷博士の訪れた昭和 30 年の当時と違い、多くの方々のご尽力により今では寺田寅彦記念館として管理され、このようにいつでも訪れることができます。また宮会長をはじめとする友の会の会員の方々の熱意で銅像も建立されました。友の会として生誕 150 年を見据えて、さらに多くの方々に寅彦先生を知っていただき、“人々の心の中に”寅彦先生を蘇らすことが大切なことではないでしょうか。微力ながら私も力を尽くしたいと思います。



〈参考文献〉

- ※『寺田寅彦との対話』(宇田道隆・弘文堂・昭和 25 年)
- ※『寺田寅彦の地球観 忘れてはならない科学者』(鈴木堯士・高知新聞社・2003 年)
- ※『プレートテクトニクスの拒絶と受容』(泊次郎・東京大学出版社・2008 年)
- ※『中谷宇吉郎集 第八巻』(中谷宇吉郎・岩波書店・2001 年)
- ※『植木枝盛 無天雑録』(家永三郎/外崎光広編・法政大学出版局・1974 年)